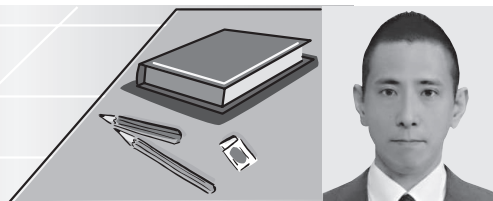


学生時代と図書館 93

「背表紙を読む」

村山弘太郎



私の通った大学の図書館は、本館が地上3階地下2階、分館も合わせると蔵書数220万冊を超える大規模なもので、地下の書庫には三年生以降は自由に入庫できるきまりであった。恵まれた図書館ではあったものの入学当初に何度か図書館へ向かっただけで、開架図書を一通り見たら、レポートでもない限り足を向けなくなっていた。

三年生になり書庫へと入れるようになった時、ある先生から「書庫にある蔵書の内、興味のある本のタイトルをまとめる」という課題が与えられた。その際の指示は、内容まで読む必要はないので「背表紙」だけを読めと言うものだった。

簡単な作業だろうとすぐには図書館に向かわず、提出期限ギリギリになってからようやく初めて書庫へと入り、まずは愕然とした。それまで目にしていた開架とは違い、右を見ても左を見ても所狭しと並ぶ書棚に詰め込まれた本の洪水。目当ての日本史や民俗学の本がどこに配架されているのかすらわからない。ようやくたどり着いたもののまたもや本の洪水。日本史だけでも古代、中世、近世、近代と時代別に分類され、さらには地方史、仏教史や神道史、生活史などの分野史に書棚が分かれ、「この一角、すべて日本史」という状態であった。

本は読んでいるほうであると自分では思っていた。そのため日本史や民俗学の関連書籍、その中でも特に自分の興味のある分野に関しては、読んでいないにしても網羅的に書名だけは知っているつもりでいた。しかし実際には初めて見る書名がずらりと並んでいる。しばし呆然としていたが、課題提出日も近いことから仕方なく端から順に書名と著者名のメモを始めた。

作業を始めてみるとこれが意外と面白い。気がつけば課題とは関係のない作業もはじめていた。まずは出版された年代が気になり奥付を確認して年代順に本を並べてみた。するとそれぞれの本の間に相関関係のようなものが見えてき

たので、次に各本の「はじめに」や「序章」など冒頭部分を読んでみた。そこには研究の意義とともに、どのような研究がその本より先んじて行われているのか、という先行研究の整理が行われているのであるが、それを見ると各書の相関関係はより有機的に見えるようになってきた。さらには関係無いと覚えてメモしていなかった書名が挙がっているのを探すが、片っ端から背表紙を読んでいたおかげでその本がどこにあるのかすぐに見当をつけることができるようになっており、苦労すること無くそれを手に入れることができた。

そのような作業を繰り返しているうちに、研究テーマには流行り廃りがあることや、新しい研究テーマが開拓される際にはどのような社会背景や問題意識があったのかなど漠然と見えてくるようになった。つまり研究の動向や潮流を垣間見ることができたのである。また同時に自分の新たな興味関心も発見することができた。課題には反映させることはできないが、色々な面白そうだと感じる本を目当ての本を探す過程で発見することができたのである。最終的に提出した課題は書名と著者名の羅列でしかなかったが、課題の意図は膨大な書籍の中から自分の研究に必要な文献を収集し、体系付けて整理することで問題を発見して自らの研究もその中に位置付けていくという研究史整理の初歩を体験させるためのものであったと後年になってから気付いた。

現在では検索エンジンを利用することで容易に必要な文献を整理できるようになったが、図書館の書棚を端から端まで眺めながら本を探すという方法も良いものである。そこにはきっと思わぬ本との出会いが待っているだろう。

むらやま こうたろう（講師・日本史学、民俗学）